

第三十三回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

宮本 久雄 著『パウロの神秘論 他者との相生の地平をひらく』

(2019年12月20日刊 東京大学出版会)

宮本久雄 みやもと・ひさお 東京純心大学看護学部教授

1945年(昭和20年)2月23日 75歳 新潟県高田市(現・上越市)出身

専門は、ギリシア・ラテン教父哲学、物語論的聖書解釈学

1970年(昭和45年)3月、東京大学文学部哲学科卒業(学士号取得)。1972年(昭和47年)3月、同大学大学院人文科学研究科修士課程修了(哲学修士号取得)。1979年(昭和54年)4月、カナダ・オンタリオ州立哲学神学大学修士課程修了(神学修士号取得)。1981年(昭和56年)5月、仏立エルサレム聖書学研究所修了(同研究所特別研究員号取得)。1982年(昭和57年)2月、パリ・カトリック大学神学部博士課程中退。同年4月、東京大学教養学部助教授。1990年(平成2年)4月、同大学教授。1991年(平成3年)4月、同大学大学院総合文化研究科教授(～2007年3月)。2002年(平成14年)4月、学術博士号取得。2007年(平成19年)4月、上智大学神学部教授(～2015年3月)。2015年(平成27年)4月、東京純心大学看護学部教授(現在に至る)。同年5月、Magister in Sacra Theologia 号(STM)授与。

主著に、『存在の季節 —ハヤトロギア(ヘブライ的存在論)の誕生』(知泉書館、2002年)、『他者の甦り —アウシュヴィッツからのエクソダス』(創文社、2008年)、『ヘブライ的脱在論 —アウシュヴィッツから他者との共生へ』(東京大学出版会、2011年)、『他者の風来 —ルーアッハ・プネウマ・気をめぐる思索』(日本キリスト教団出版局、2012年)、『出会いの他者性 —プロメテウスの火(暴力)から愛智の炎へ』(知泉書館、2014年)などがある。

受賞のことば

『パウロの神秘論』の受賞を通して、私が語りたかったエヒエ論が少しでも多くの人々の目にとまりうる機縁をえたことを感謝したい。というのも、私は久しく根源悪の現象(アウシュヴィッツ、巨大科学、経済=技術=官僚支配など)とその思想(化石化した形而上学、^{イデオロギー}実体主義)をどう克服し、人間がその顔を喪った現代にどのように人の絆を結び直せるかという問いを担い、その間に実体化を破りうるヘブライ的動詞エヒエに注目し、そのエヒエの思想を物語論的に考究してきたからである。

その流れの中で今回私は、パウロが律法実体主義・ユダヤ教を超克し、エヒエの息吹である霊のエネルギーに拠って全人類的な人間の和の地平を抜き出したことに感動し、『パウロの神秘論』を世に問うた。その際「神秘」を私達がエヒエの体現であるイエスとの身体的同形化によって、引き裂かれた人間性の甦りに向けて歩む道として示した。燈燈無尽。

《選考委員評》

野家 啓一

受賞作『パウロの神秘論』は、わが国キリスト教研究の泰斗、宮本久雄氏が渾身の力をこめて上梓された、文字通りの労作である。高度の専門書であるにもかかわらず、そこにアクチュアルな現代的問題意識が通奏低音のように響いていることが、評者にとってはとりわけ印象的であった。すなわち、一方で本書は旧新約聖書をはじめとする古典テキストの緻密な読解と、その解釈をめぐる膨大な先行研究との丹念な対質が行なわれており、その部分については評者のような素人の容喙を許さない。だが他方で、その学問的作業は、単にアカデミズムの内部に留まるものではなく、現代の根源悪とそれに由来する危機との対決という、喫緊の課題と正面から向き合っている。根源悪とは「ナチス・ドイツ支配下の強制収容所アウシュヴィッツ、原子爆弾を生み出した巨大科学、エコノ=テクノ=ビュウロクラシー（経済技術官僚制）支配」にほかならない。そのことによって本書は、専門研究書という枠を超え、現代人の心胸に訴えかけるものとなった。

それでは、パウロの神秘論は、それとどう関わるのか。著者が「神秘主義」ではなく「神秘論」という表現を採るのは、パウロの思想が、グノーシス主義のような神性と合一融合する「合一神秘主義」とはおおよそ相容れないからである。パウロ神秘論の核心は「弱さにおける強さ」にある。これが著者のパウロ理解の根底にある把握である。その意味で、パウロこそは「異邦人もユダヤ人も、自由人も奴隷も、男も女もみな一致して相生できるメッセージ」を語り伝えた人にほかならない。つまり、パウロの神秘論は、キリスト教の枠を超えて人類の地平を切り拓いたのである。その息吹は遠く「ガンジー、マザー・テレサ、アッシジのフランチェスコ、親鸞、良寛などの上」にまで及んでいる。こうした著者のヴィジョンは、コロナ禍のもとに呻吟する現代世界への力強いメッセージともなっており、選考委員が一致して受賞作に推したゆえんである。最後に、本書が大作にも拘わらず、論文集ではなく書下ろしの著作として刊行されたことに敬意を表したい。

関根 清三

宮本久雄氏は、旧新約聖書から中世哲学に至るキリスト教思想の研究を活動の中心に据えつつ、現代の危機的状況の分析と超克に向けても、旺盛な発言を続けてこられた碩学である。受賞作『パウロの神秘論』も、現代の危機に向けて、その根源悪を超克する思想的地平を披こうとする意図が明確

である。根源悪の特徴を、氏は 20 年来さまざまに分析してこられた。例えば、他者を抹殺する虚無的意志の具現としてアウシュヴィッツがあった。また帝国主義から金融資本主義に至る経済的全体主義の危機がある。政治経済だけでなく技術領域でも専門家である官僚が自然や民族を支配しようとするエコノ＝テクノ＝ビューロクラシーの構造がある。また原子力や巨大科学を用いて他者を支配しようとする暴力がある。こうした根源悪の温床となるのは、思想的にはヘレニズム～西欧哲学神学のオント・テオ・ロギア（存在＝神＝論）の系譜であり、それを超克するために、宮本氏は、生成および他者への自己開放・自己超出を表わす旧約聖書『出エジプト記』3 章の「エヒエ」（私（＝神）は在る）に着目して、エヒエロギア（ヘブライ的脱在論）を提唱するのである。更にこれは新約聖書のヨハネ福音書 8 章によるイエスのエゴ・エイミ（私は在る）と通底し、その神の子が人間となる脱在のイエスと霊的に出会ったパウロにまで響き合うと言う。

受賞作は、氏のこうした年来の思想を踏まえつつ、初期キリスト教の伝道者であるパウロの書簡を、現代の聖書学の成果を取り入れながら精緻に読み解いた御力作である。解釈学的な地道な作業が、エヒエロギアによる根源悪超克の方途を示す現代への鋭いメッセージ性と結び付いた稀有な作品として、本年度の候補作中、一頭地を抜くお仕事であった。

今年はコロナ禍のため授賞式でお目にかかることがかなわないが、お会いしたら伺っておきたかったことが幾つかある。例えばエヒエは「私は在る」ないし「私は成る」を意味するヘブライ語自動詞だが、氏はこれをエクソドスにおいてイスラエルの「奴隸的無を神と共に在る民とする神の創造的有り様」と他動詞的に解する。この辺りの言語学的妥当性はどうか担保されるのだろうか。また、エヒエロギアが、パウロにもイエスにも、はたまたガンジーやボンヘッフアー、更には「飢餓の人に、自ら飲むための水を一杯与える老婆など、無数の無告の民」にも顕れていると言い得る根拠は何なのか。特定宗教を超えたユニヴァーサルリズムを語る重要な論脈だからこそ、それぞれの場合の分析比較を経た論拠を伺いたいという思いも切なるものがある。晴れてコロナ禍が終息し、碩学の御教示を仰げる日が近からんことを。

黒住 真

宮本久雄『パウロの神秘論』が、この和辻哲郎文化賞(学術部門)を受賞することには、どのような意義があるのだろうか。本書の実証性あるいは個々の把握といった部分は、私には踏み込むこともできない。読者のかなりの方も本書でなぜこうした議論が行われているのか余り分からないのではないかと。ただ、それでも、総

じて含まれてくる文化的学術的な意義はとても大きい、と私自身考えている。どういふことか、そのコンテキスト、文脈、見えてくる要点について、関係するところを自分なりに歴史的に遡りながら少し記してみる。

人間は生きてるとき、たとえ知識や科学をよく用いても、物事をすべて判るわけでは全くない。ただ、その矛盾を孕んでもより互いに交わって生きる本質がある、それが神秘と称される。その点をパウロがまさに担っている。パウロは、以前すでに決まった動きの中で活動していたが、それが断絶されまさに愛を体験して生き返って相生へと働く。こうした「本質」は、何なのか —— それを本書はとらえていく。

パウロの以前すでに決まったかのように動いていた形態、これは東洋や日本の近代哲学では、国家、種族、場所といった概念に繋がる、と私には思える。実際、臣民はもちろん日本人が決まった民族観に入ると安心し活動することもよくある。が、パウロはそれらとは違う体験をしさらに活動していった。パウロには、更なるイエス・キリストや愛や担われた瞬間がある。それが何なのかが、また議論として展開する。このあたりの人称、義、律法などをイエス・キリストとともに本書はとらえる。そこでの議論には入らないが外から見て大事なものは、やはりキリスト論、聖霊論である。もつという近代日本ではその曖昧さのまま生命主義が国家主義に入っていた精神があるからである。

ということは、そこからどんな悪の発見とともによき世界が受難とともに構成されるのが次の問題である。本書の後半はそれをとらえ、さらに現代の科学技術やその傲慢な力とは違った動きをパウロからの pneuma (いわば聖霊のはたらき) をどう見いだすかが本質的な問いとなる。この点をめぐって、本書では有賀鐵太郎とその次の地平を示唆する。その内部はまたそれぞれ辿り、議論する必要があるに違いない。

この pneuma をめぐっては、1990 年代ころから『聖霊は女性ではないのか』という書物に見える女性たちやその神学の働きがあることを連想する。それが結び付くことで、間違った国家や全体や資本主義の動きがよりよい地平に戻るのではとも期待させる。現在のコロナ感染は、近代から現代への「進化」が手元の地平を無視したことと関係する。本書は、人間が傲慢ではなく神と土地によって生きることの大事さを教えてもいる。その意味では、現在の和辻哲郎文化賞にも相応しい。